

様

住岡 狂風

□ 道に生きんとするものは、ある時は寂しいだろう。一時は苦しいだろう。けれども、権勢に生き、物質に生き、享樂に生きんとする者は永遠に（原文不明）だろう。汝よ、権勢（原文不明）享樂の光に汝の眼（原文不明）らぬ。ただ汝は、永遠の汝の内に輝ける光を仰げ。しかして汝が道に生きんとする手段としてのみ、物質と慰安と休息と享樂を求めよ。

□ 「親の命令にそむいてもよいものでしょうか。」と、不思議にも三人の方から問うて来ました。きわめて誤解され易い大きな問題です。私は次の様に考えます。多くの場合親にそむくのは悪いことです。小さい時からの親の恩愛を思えば何で親にそむかれましょう。ただし、親も人間です。親の言うことが皆善だとは言えません。特に親が親の利己心の犠牲にしようとした時、子供たる者の人としての生活が出来ない時、悪を強いられた時には、親に教えねばなりません。親にそむいても正しく進まねばなりません。

次には、「理想のためには親を捨ててもよいか。」私は、もし、その理想の意味が、真に人として、真面目な動機から出ており、その理想なくしては、生き得ない場合には、それも仕方がないと思います。ただ、成功熱にかられたり、自分の利己心のためや、我がままから出た理想などは問題にはなりません。私たちが最高善を求めて、真実に生きんとすれば、時には、親も兄弟も、子も妻も、失わなければならぬかも知れません。

巻頭の叫び

自由を求めよ

自由を求める声が世界中に聞える。自由のために戦い、自由のために生活し、自由のために叫ぶ。人間は自由を尊ぶ。自由を離れて人生はない。されど自由よ。もし利己的な人間が、自分の我ままや得手勝手のために叫ぶ自由ならば、自由ではなくて放縦なのだ。放縦を求める者は、死ぬるより外ない。

我々が外的束縛を離脱することを自由とするならば、自由を要求する前に、自己訓練がなくてはならぬ。自己訓練のない者には自由は与えられない。他人の秘密を漏らす者には、他人の秘密を聞く自由はゆるされぬ。財布にある金は全部使う者には、公金を托することは出来ない。強いられなければ働かない者には、自由に仕事さすことは出来ない。

時間を守らない者には、「時間を守れ」の束縛があたえられる。自由を与えられる前に、自己を訓練せよ。訓練なき人間に自由を与えるのは、「狂者に剣を与えるが如く、幼童に火を与えるが如し」だ。自由を叫べ、しかもその前に、自己訓練に成功せよ。

しかし、我々の得んとする自由は、なおそれ以外に、しかも、それ以上のもつともつと積極的なものがある。我々内心の自由である。真の自由だ。のどが渴いた馬に水を見せれば、必ず飲むだろう。渴いた人間に水を見せれば、必ず飲むだろうか。「渴しても盗泉の水を飲まず。」とて、死んでも飲まないこともあるだろう。渴くを忍ぶは人間心の自由である。貧にいて悲しまず、卑しい心をおこさず、富んで傲らず、高ぶらず、礼を好むのも。酒をもつて、金銭をもつて、言葉をもつて、誘惑されても悪に従わないのも。敵を悪まないのも。皆これこそ真の自由である。自由は、私たちの内心に生れる。酒の香の鼻をつく時、借金しても飲む者は馬に近い。よく心の欲と戦って、飲むべからざる時飲まないのは人間である。そこに、飲まないですむ自由がある。

私たちの求める自由は、道徳の理想境をさして言うのだ。

善を求め、理想に突進する時、その途中に横たわる何物をも衝き破って進むところに、無碍の一道がある。それこそ真の自由である。

修養の一路をたどる者に与えられる自由である。

心霊の扉

一人の男があつた。彼は清い清い泉を持つていた。岩の間から滾々と湧き出る泉は暑い三伏の夏でも氷のように冷たかつた。

旅に疲れた人たちや喉の渇きに苦しむ人たちは、皆この男に頼んでは泉の水を飲んで行つた。彼は誰にも水を喜んで与えた。旅人たちも心からの感謝の涙を流して、礼を言つて去つた。水を与える男も幸だつたし、与えられる彼らも幸福であつた。

ある日一人の悪い、心のひねくれた男が来た。そして、泉の水をくれと頼んだ。泉の持ち主は喜んで、来た男に水をやつた。悪い男はもらつた水を飲まないで地上に捨てた。男は更に水をくれと言つた。持ち主は又やつた。悪い男は、又も地上に捨てた。そして彼は言つた。「こんな水が何だ。ほしくもない」と。塵をつかんで泉の中に投げ入れて、走つて去つた。泉の持ち主は腹を立てた。

その後、勝手な男や女が来て、泉を濁したり、水を粗末にしたりして、行つた。泉の持ち主の心はもう昔のままではなかつた。彼は、泉の扉を閉じてしまつた。そして彼は二度と人にその泉の水を与えなかつた。

旅に疲れて、弱り果てた者が来ても、渴くために死になつた女が来ても、彼は見向きもしなかつた。かくして、彼の心霊の扉は閉じられた。

「人を見たら盗人と思え。」何と悲しい言葉だろう。昔からのたくさんな人たちが自分の心を裏切られて永遠に心の扉を閉じた人たちの作つた言葉だろう。

私たちは人に親切もつくし慈悲深くもする。けれどもその愛せられた人たちは、皆「間もない内に私たちの心を裏切つて、去つてしまふ。そしてその度に「何だ馬鹿馬鹿しい。」と言つるので、心霊の扉を閉ざして行く。悲しいことだ。そしてそれは、人を愛しようとする人の皆が味わわなければならない苦だ。地上にあればほど大きなものを残して死んだロシアのトルストイ、彼は徹底的な犠牲的愛を説いた。彼は意志強く人を愛しようとした。けれどもシベリアの百姓たちは、彼の愛をふみにじつた。そして、ついには、三十銭のお金を一日中持つて歩いて与える人を見出すことが出来ないほどトルストイを臆病者にしてしまつた。

無智な、何にも責任を持たない人間たちの間に生きて、それらの人を愛して行くこととするのは辛いことだ。彼らは、人の愛に紐ひれる。人の情に甘える。そして、時には恩を仇で返す。

私たちは偽りを言つたり、恩に紐ひれたり、疑つたり、怠けたりする度毎に、私たちの恩人に癒すことの出来ない傷を与えている。そのたび毎に、人の心霊の扉を閉ざしている。実に恐しい事だ。

私たちは、他人の心の扉を閉じてはならない。これほど大きな罪はない。そして又自分の心霊の愛の扉を閉じてはならない。

自分の心を裏切られたその上に、心霊の扉まで閉ざしてはならない。しかしそれは辛いことだ。

私たちは色々な人たちの中にたつて生きて行かねばならない。たとえ私たちのしていることが好いことでも、色眼鏡で見ても、悪く言う人もあろう。ことさらに邪魔す

る人もあろう。真実に愛した人が私たちの心を裏切つて私たちを悪み恨むこともあろう。まことに私たちが真実私たちの心に従つて正しい道を歩んでも、責任を感じない、口の軽い世の人たちの色々な批評の中に立つて生きなければならぬ。私たちは辛いことだ。何が辛い。そのたび毎に、私たちの心霊の扉は閉じて、荒んだ、人を愛し得ない寂しい心の持ち主にならねばならないからだ。愛してくれるはずであった主人に裏切られた犬や猫は、もはや昔の犬ではない。猫ではない。全ての人を見れば走つて逃げて行く。

私たちは、一人の悪人に欺かれたとて、後九人の心まで疑つてはならない。否々、我が心を裏切る者の哀れさを思わなければならぬ。我が真実を知らざる哀れな彼らの為に祈つてやらねばならない。そして又、自分のまだ足りないことを恥じて一層務めねばならない。

私たちは、他人の真実をも疑うほど小さい自分になつてはならないし、私たちの熱い涙を要する哀れな弱い人生の苦しみに疲れた人をも愛し得ないほど、心霊の扉を閉じてはならない。しかし、それは辛いことだ。けれども愛し得ざる寂しみ、愛を知り得ざる寂しみよりは、幸福な辛苦だ。

舌

は蜜よりも甘し。
は劍よりも鋭し。
は駟しよりも速し。
は火よりも烈し。
は肝より苦し。
は他人を殺し、他人を生ず。
は幸を招き、不幸を招く。
は仏となり、鬼となる。
は我を益し、我を害す。
は敵を造り、味方を作る。

恐るべきは舌である

真に恐るべきは舌である。英雄偉人の舌一度動いて言葉を発すれば、千万年朽ちな
い千古の金言となつて、後世の人心を支配する。楠木正成の湊川に戦い刀折れ矢尽き
て、将に弟正季と刺し交えて死なんとする時、忠君の至情ほとばしり出でたる、「七度
生れて朝敵を亡ぼさん。」の一語は、日本歴史の存在する限り、国民を発奮さすべき叫
びである。釈迦一代の長口舌は八万四千の経文として残り、後世衆生を濟度する。井
戸ばたに集まる女たちの、悪口、評判、呪い、怒りも舌によつて生れ、満堂幾千の聴
衆を酔わす大雄弁も舌によつて発す。母親が毎日我が子に聞かすところの「お前は馬
鹿だ。お前は駄目だ。」の一口はついにその子を馬鹿にしてしまい、添乳する母のネ
ソネコ歌に稚児の心は天上に遊ぶ。

実に人の世界は言葉の世界だ。愛の泉からほとばしる言葉によつて世界は浄めら
れ、怒り嫉妬呪いから燃出もえいずる毒舌には、人は怒り、人は恐れ、人は悲しむ。世界十六
億の人間の毎日毎時の言葉よ。真に恐るべきは十六億の口より出る言葉だ。

愛の言葉 力あるものは！

愛の心のほとばしり出た言葉より外に、力あるものがあるうぞ。「氣ヲ附ケ」将校
の口から出た秋霜烈日の様に厳格な号令の中にも、その底に、「列ぶ兵士は国家の干城
だ。大元師陛下の赤子だ。国家のためには無くってはならぬ一人格だ。ああ愛すべき
忠実なる我が部下よ。」の愛の流れがあるならば、それは直ちに「朕は汝等を股肱と頼
み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ、その親しみは特に深かるべき。」との大元師陛下の大
御心に合体致すべき、尊厳高貴なる一言ではあるまいか。我が国家はこの一言この一
声によつてのみ「汝等は、大君のため祖国のため赤き血をおしまない。」の自覚を尊き
軍人に与えることが出来る。

人間一人が、真の人間として生きるためには、父の厳格なる愛の言葉と、理智に目
覚めたる母の慈愛の言葉とを要する。

沈黙の光

人生は言葉の世界である。舌なくしては一日も生きる能わず。人生にのみ向上発展あるも、思想交換の具たる言葉あるによる。故に、舌には人類生活上最も偉大なる力がある。熱烈なる雄弁には懦夫も立ち、卑婦も泣く。雄弁なるはよし、能弁なるもよし、けれども時には、大雄弁にも増して、真に光のあるものがある。それこそは、沈黙である。口を開く必要のない時、口を開いてもその効果のない時、口を開くべからざる時、黙々として語らない。山の如く動かず、林の如く静かなるは、雄弁以上の雄弁である。「口は禍の元」私たちは口を開きすぎている。言つてはならぬ時、言つては、言葉少ないがため過つた者は少ない。多くは言葉多きための失敗である。私は、私の口数の多いのにあきれている。私たちは、沈黙を守らなければならぬ。

私たちが沈黙を守るのは、沈黙そのものが目的ではない。出すお金を節約し、無駄遣いすなと言ふのは、他日大いに有益に使わんがためである。私たちが、物を見、他人の話を聞き、書物を見るのは、心の中に入れ納めるのである。話をする事は出すことである。私たちの舌は、大いに話さなければならぬ。人を励まさねばならぬ。慰めねばならぬ。国家社会を利せねばならぬ。私は、まず、沈黙せねばならぬ。しかして後、大いに語らねばならぬ。

私たちの口はこの一つから

他人の秘密を知つた時、その秘密を他人に語らないで自分の心に蔵つて置くことは辛いことだ。他人の秘密を秘密にしないで言つてしまうのは、まだまだ自分の小さい証拠だ。私たちはもし、他人の信書の秘密を犯したら、刑法上の罪人にならねばならぬ。しかも人には信書以上の秘密を持つ人がある。他人の秘密をあばくことは、罪でなければならぬ。秘密を守らないために、友との信義は破れ、夫婦の道にそむき、国家の法にふれる。

私たちは口の道徳のまず最初に、他人の秘密を守ることを実行しなければならぬ。

舌の奥の心

舌と言つた。けれども舌に責任はない。舌の奥には心がある。私たちは、真実の心の命令に叛いて、虚偽の自分の心に従つてはならない。真実の心と口とが一致しなければならぬ。心と口とを一本の釘で貫いたら忠の字が出来る。忠は「マコト」あるいは、「タダシ」と読む。私の口は忠でなくてはならぬ。

おお同胞よ

□ 播いた種なら刈らねばならぬ

恐しい事だ。恐しい事だ。播いた種なら刈らねばならぬ。

己に出でたる物は己に帰る。恐しいことだ。けれど私たちには何する事も出来ん。人が信用してくれない。貧乏で困る。不幸が辛い。我より出でて我に返る。人の知ったことでない。恐しいことだ。人間はみんな、我が造った自分の重荷を負うている。親に譲るわけにも、友達に助けてもらおうわけにも行かない。たつた一人だ。たつた一人だ。たつた一人で忠実に重い荷のまま歩まねばならぬ。

不幸な、生れつき悲しい身の上、誰が作つたろうか。知らない。何で人間にわかるう。もし鬼でもいるものなら笑っているに違いない。「お前の罪はお前負え」と。恐しい事だ。私たちは何も知らないで段々と荷を重くしているのだ。

□ 自分を人だと思ってるか？

おお同胞たち、自分を人だと思っているか。真実人間だと思っているか。我々の生活は、真実に自分を人間だと見ることに初まるのだ。人だと知っているだろう。けれどもお隣の八兵衛も人間だ。そして俺もそれと同じ人間だと思つてはいないか。それがまちがいだ。「私は人間だ。何ものより尊い人間だ。私はたつた一人しかない私だ。お隣の八兵衛も私のような人間だ。」これでなくてはいけない。

私たちは自分を小さい者にしか見ていない。けれども、貧しいにしても賤しいにしても自分にとって自分より尊い者があるうか。たとえ一万円かけて造つたお座敷でも、障子の骨一本折れておつたらどうだろう。その完全を誇ることが出来ようか。宇宙は、不増不減だ。私一人を取り去つた後、その大を言い、完全を誇る事が出来ようか。否、私一人の存在を否定したら、宇宙そのものの否定である。

自分は人間だ。まずそれから考えねばならぬ。

□ 真に人の子は、我より大なるものを我の内に蔵む

我が体はこれ五尺。象の大なるに及ばず。足はこれ地上を離るること能わず。鳥の如く飛ぶことは出来ない。

けれども我々の心は自由に働く。自由に思う。清く清く澄み、燦爛さんらんとして輝いては、人生を美化し浄化し、濁れば塵灰の風に狂う如く、炎炎燃え上る猛火の如く、腐敗せる死体の如く、人生を阿鼻叫喚の巷と化す。

実に人は、その心の中に、我より大なるものを蔵す。神や仏も我が心の所作であり、天地宇宙も我が心の中にある。